

アミーゴ会だより

2020年1月
通巻第41号
季刊 2020-I
www.mex-jpn-amigo



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：笠井道彦

新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会
会長 河嶋正之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆さまにはご家族お揃いでお健やかに初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年が素晴らしい一年であることをお祈りします。

メキシコ・日本アミーゴ会は2000年9月16日に呱呱の声をあげました。「日本とメキシコ両国民間の民間友好親善の絆を強める」(設立趣意書)べく創立されて以来20年、先輩諸氏のたゆまぬ努力により各方面で素晴らしい実績を残してきました。昨年3月の総会で、15年の長きにわたり本会を牽引してこられた上原尚剛さんが名誉会長になられ、私が後任として会長職を引き継ぐこととなりました。会員の皆さまの更なるご協力を得て不肖ながら本会活動のいっそうの充実に努めたく存じます。どうぞよろしくお願いします。



メルバ・プリーヤ (Melba Priá) 大使が昨年6月に着任されました。プリーヤ大使とも緊密な協働のもと、草の根ベースでのいっそうの相互理解の拡大と深化に少しでも貢献したく存じます。毎年恒例の「メキシコ歴史文化講演会」は時宜にかなうテーマを企画し講師を選定して、在日メキシコ大使館の全面協力を仰ぎながら運営します。アミーゴ会とともに誕生した「フィエスタ・メヒカーナ in お台場 Tokyo」は第21回を9月に開催予定で、本年も実行委員会に参画し協賛します。親睦ゴルフ会も予定します。会報(四季報)の「アミーゴ会だより」も会員交流誌として継続したく、会員諸兄姉の積極投稿を期待します。「御宿アミーゴ会」との友好関係も維持強化します。会員自身の文化活動についてもメルマガ等で情報共有します。

メキシコでは2018年12月にアンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドル (Andres Manuel Lopez Obrador : AMLO) 大統領が誕生して1年余が経ちました。AMLO 大統領は新興の MORENA (国家再生運動) を率いて当選し「左派」のレッテルを貼られています。国民視点の“国家改造”を目指す「第4次変革 (4Tth)」を標榜し、主要政策をトップダウンで迅速実施しています。ときに「定石」を踏まない政治決定もあり企業経営環境が不安定になることもあります。しかし、就任早々から NAFTA 改定、中米移民キャラバン、米墨国境の壁建設等々、隣国の「異形」の大統領の政策にメキシコの国益を保全しながら対応してきました。新 NAFTA (英語 USMCA : 米墨加協定 / 西語 TMEC : 墨米加協定) の三カ国批准と発効も目前で、漸くビジネス環境 (バリューチェーン) も安定化します。諸分野での未解決課題山積するも AMLO 大統領の「新しいメキシコづくり」への国民の高い共感と期待からでしょうか、各世論調査では依然として60%前後の支持率を獲得しています。メキシコは安定した民主的政治体制を堅持し、堅実なマクロ経済運営と自由貿易政策とを国是とする、大変な親日国であり続けるでしょう。私たちも変貌するメキシコと手を携えて歩みたく存じます。注：「4T」とはメキシコ史の独立戦争(1810-1821)、レフォルマ(1854-1867)、メキシコ革命(1910-1940)に次ぐ「第4次変革」。

メキシコ・日本アミーゴ会は「会員相互の親睦」と両国間の「友好親善の増進」を目的(会則第3条)とするメキシコ大好き人間が集うボランティア団体です。今年2020年の干支は「庚子(かのえ・ね)」で、庚は開花後に種子を残す準備期を、子は種子中で新しい命を育む様子を象徴すること。会員一人一人が知恵と創意工夫を持ち寄り、新しい時代に相応しい活動を支える基盤づくりに努めたく存じます。老若男女や前歴を問いません。我こそはと挙手して本会の活動を積極果敢に担っていただくことを願いながら、重ねての新年のご挨拶とさせていただきます。(了)

= 目次 =

1. 新年のご挨拶	アミーゴ会会長	河嶋正之	...1
2. 新年祝賀メッセージ	駐日メキシコ大使	メルバ・プリーヤ	...2
3. 第1回講演会報告：「メソアメリカ先住民の絵文書と植民地時代の変容」	専修大学文学部教授	井上幸孝	...3
4. 追悼：「ミゲル・レオン=ポルティージャ博士(1926~2019)を偲んで」	専修大学文学部教授	井上幸孝	...4
5. 私とメキシコ：「食の世界遺産 メキシコ料理へのアプローチ 7」	La Casita オーナーシェフ	渡辺庸生	...5
6. お知らせ：「黒沼ユリ子さん御宿町日墨友好文化大使に」「特別展 波濤の彼方-メキシコからの文物」			...7
7. 私の本棚：『黒い絵本』『家康とドン・ロドリゴ』『テキストとしての都市 メキシコ DF』／あとがき			...7

メキシコ-日本アミーゴ会に寄せる メルバ・プリーア駐日大使の 新年祝賀メッセージ

在日メキシコ大使館を代表し、駐日メキシコ大使として、日本でメキシコに関する知見を広めようとたゆまぬご尽力を重ねていらっしゃる「メキシコ・日本アミーゴ会」の皆様方に敬意と謝意をお伝えすることができ大変嬉しく思います。また、2020年を迎えるにあたり、「アミーゴ会」会員及びご家族の皆様方のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

2019年におきましては、恒例の「フィエスタ・メヒカーナinお台場」にて会員諸氏の意欲的なご参加、ご協力を賜りました。同イベントは20年間に渡る開催を通じて、日本にてメキシコ文化を伝える最も大切な行事の1つとなっています。この大切な祝賀行事の実施に「アミーゴ会」の皆様



MÉXICO
EMBAJADA EN JAPÓN



EMBAJADA DE MÉXICO

**Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría
para la Asociación "Amigo-Kai"**

Tokio, Japón, enero de 2020

Como Embajadora de México en Japón es un gusto para mí poder manifestar mi aprecio y reconocimiento, así como el de toda la Embajada, a la Asociación de Amigos México-Japón "Amigo-Kai", por su continuo y constante esfuerzo en promover el conocimiento sobre México en Japón. Al mismo tiempo, transmitir a todos los miembros de la Asociación un afectuoso saludo y nuestros deseos de que 2020 sea un año lleno de paz, momentos gratos, salud y prosperidad para ustedes y sus familias.

En 2019, la entusiasta participación y el apoyo de Amigo-kai fue decisivo para realizar una vez más, la Fiesta Mexicana en Odaiba, que se ha constituido a lo largo de los últimos 20 años como uno de los más importantes festivales de cultura mexicana en Japón. El impulso y la entrega que los miembros de Amigo-Kai aportan a esta celebración es testimonio fiel de la amistad que mantienen hacia México y que enriquece los lazos entre nuestras dos naciones.

Apreciamos y agradecemos también todos los esfuerzos que la Asociación de Amigos de Mexico, sus directivos encabezados por su Presidente, el Sr. Kawashima, y sus socios, hacen para impulsar y promover el conocimiento de México en Japón. Destacan entre estas labores el ciclo anual de conferencias que en 2019 estuvo dedicado a explorar más el conocimiento de las antiguas culturas de México y el impacto de su encuentro con Europa, en el 500 aniversario de la llegada de Hernán Cortés a tierras mexicanas.

En la Embajada de México en Japón deseamos que este inicio de 2020 sea un tiempo de paz y armonía para todos los integrantes de Amigo-Kai y confirmamos nuestra firme intención de continuar la fructífera colaboración que hasta ahora hemos mantenido, para impulsar aún más el entendimiento y la amistad entre los pueblos de México y Japón.

Atentamente,

Melba Pría
Embajadora

2-15-2 Nagata-cho, Chiyoda-ku, Tokio, Japón, 100-0114
Tel. (81)3581-1131 Fax. 3581-4058, <http://www.sre.gob.mx/japon/>

方の働きかけとご尽力を賜れるということは、皆様方が我が国メキシコに対し長きに渡り友情の念を抱いてくださっていること、この友好関係が両国間の絆を強めるものとなっていることの証でもあります。

また、「アミーゴ会」の河嶋会長をはじめ、メキシコに関する見識を日本に紹介し普及させる活動を行っていらっしゃる会員の皆様方に尊敬と感謝の意を表したいと存じます。毎年開催されている歴史文化講演会では、2019年はエルナン・コルテスがメキシコの地に到達してから500年が経過したことに因み、メキシコの古代文化と西欧文化が遭遇した史実を掘り下げられた活動が特筆に値すると思います。

在日メキシコ大使館は、2020年を始めるに際し、新年に「アミーゴ会」の皆様方が平和と調和に溢れるひとときを過ごしていらっしゃることを祈りつつ、メキシコと日本両国民の相互理解と友好関係をさらに発展できるような実り多き協同作業を継続できると確信して新年のご挨拶とさせていただきます。(了) (メキシコ大使館記)

【編集部注：メルバ・プリーア (Melba Pría) 大使は昨年6月、駐日メキシコ大使として着任されました。これまでにインドネシア(2007~2015.3)とインド(2015.4~2018.5)でメキシコ大使として活躍されました。また、メキシコ公教育省(SEP)のチアパス州特別事務所所長(1994~1998)を経て国立先住民庁(INI)長官(1998~2000)を務められ、先住民共同体の社会的包摂問題にもご造詣が深いとのことです。同大使は1958年メキシコ市生まれ。社会学士。公共政策学修士。国際関係論修士。国家安全保障戦略論を大学院で専攻。以上メキシコ大使館 HP (<https://embamex.sre.gob.mx/japon/index.php/ja/>)より抜粋転記】

メソアメリカ先住民の絵文書と植民地時代の変容

専修大学文学部教授 井上幸孝

アステカ王国の征服は、1519年のコルテス一行のベラクルス上陸に始まり、1521年にクアウテモクが捕えられたことで終わりを迎えます。つまり、本年(2019年)から2021年まではちょうどアステカ征服の500周年に該当します。征服からちょうど5世紀という節目を迎えるにあたり、この第1回では、先住民の歴史記録に焦点を当てて、征服前から征服後までを通観しました。

メソアメリカの絵文書

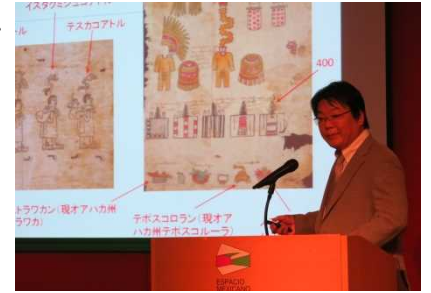
メキシコでは、スペインの侵略を受けるまで数千年にわたってメソアメリカ文明が栄えました。メソアメリカ文明にはよく知られたいくつもの文化や国家が含まれます。巨石人頭像で有名なオルメカ文化(メキシコ湾岸、先古典期)、モンテ・アルバン遺跡で有名なサポテカ文化(オアハカ地方、先古典期～古典期)、ローマ等と並ぶ世界的大都市を發展させたテオティワカン文化(先古典期～古典期)、パレンケをはじめ古典期の諸都市で特に知られるマヤ文化(ユカタン半島、先古典期～後古典期)、テノチティトランを中心に広範囲を支配したアステカ王国(後古典期)などはその例です。

メソアメリカ文明には、主食としてのトウモロコシ農耕や階段式神殿ピラミッド建築など数多くの文化的特徴があります。文字と絵文書の作成・使用もそうした特徴の一つで、この点は、キープを使用していたアンデス文明(南米)と異なる部分です。メソアメリカの文字は前3～前2世紀頃には既に存在が確認されています。



『メキシコヌス絵文書』出典: Lori Boornazian Diel, *The Codex Mexicanus: A Guide to Life in Late Sixteenth-Century New Spain*, University of Texas Press, 2018.

絵文書については、古典期には既に使用されていたことがわかっています。絵文書の作成には、鹿やジャガーといった動物の皮、あるいはアマテと呼ばれる紙のような素材が用いられ、鉱物性・植物性の顔料が使用されました。形状は折本状のものが多いですが、大きな一枚ものなどもありました。そこに記録された内容は多岐にわたり、260日から成る神聖暦の記録(トナルアマトル)、天体の運行に関する記録、政治的な出来事や自然災害などが記録された編年史、貢納品について記したいわば税台帳ともいえる文書、といった具合に、様々な種類の絵文書が存在していました。



スペイン人の到来とともに、これら絵文書のほとんどは灰燼に帰すことになってしまいました。絵文書を集めて保管する文書館のような建物もあったとされますが、征服時の戦闘により多くが失われました。また、征服後、カトリックの修道士たちが布教活動を行いました。とりわけ初期には偶像崇拜撲滅の名の下に、異教の神々の書物すなわち「悪魔の書」は焼き払われてしまいました。

とはいえ、スペイン植民地支配が始まって、およそ80～100年ほどの間、絵文書作成は続けられました。絵文書作成者(トラクイロ)の専門的な知識と技術は数世代にわたって受け継がれ、その結果、現代の研究者が「植民地期絵文書」と呼ぶ、何百もの絵文書が残されることになりました。これら植民地期絵文書には、伝統的な様式を色濃く残すものもあれば、西洋美術の影響を受けたスタイルのものも見受けられます。

先住民クロニカの登場

植民地時代には、絵文書作成の継続と並行して、先住民エリート層の間でアルファベット化が進みました。スペイン人が大航海時代の探検・征服などについて書き記した記録文書類は「クロニカ」と総称されますが、植民地支配下のメキシコでは「先住民クロニカ」と呼ばれる文書類が登場しました。

先住民クロニカとは、征服後に先住民の子孫がアルファベットを用いてスペイン語や先住民語(メキシコ盆地やその周辺ではナワトル語)で先スペイン期や征服期の歴史などを書き記したものです。こうした先住民クロニカは、征服の数十年後に登場し始めますが、特に多く書かれたのは16世紀末から17世紀初頭にかけてでした。アルバラード・テソモクの『クロニカ・メヒカーナ』、チマルパインの『歴史報告書集』、アルバ・イシュトリルシヨチトルの『ヌエバ・エスパーニャの歴史(チチメカ人の歴史)』などがその例です。

これら先住民クロニカは、私たちが抱いている先住民文明のイメージに現在も影響を及ぼし続けています。例えば、1990年代から現在まで100ペソ札の図柄に採用されているネサワルコヨトル(15世紀のテツココ王)は、文化に秀でた「詩人王」として知られています。この詩人王のイメージを確立したのは、



上記のアルバ・イシュトリルシヨチトルでした。1600年前後にクロニカを著したアルバ・イシュトリルシヨチトルは、ポマールが1580年代に書いた報告書の情報や、先スペイン期の詩歌を集めた文書（『ヌエバ・エスパーニャの領主たちのロマンセ』）を再解釈し、文化的な王、詩作に優れた王というネサワルコヨトル像を作りあげました。

ネサワルコヨトル王(メキシコ市中心部の三都市同盟庭園) 筆者撮影

そして、そのイメージは後世のクリオーリョらによって繰り返し再利用され、現在のネサワルコヨトル像につながっています。

以上のように、メキシコには、スペインによる征服以前から暦・宗教のみならず歴史的な事象も記録していた文書が存在し、征服後しばらくの間はその作成と使用が受け継がれました。それと並行して、アルファベット化に伴い、先住民クロニカも書かれるようになり、そこで提示された歴史像は後世に影響も与えるようなものになったと言えます。

<完>

追悼

ミゲル・レオン=ポルティージャ博士(1926-2019年)を偲んで



専修大学文学部教授 井上幸孝

昨年(2019年)10月1日、メキシコを代表する研究者の一人で、メキシコのみならずラテンアメリカの古代・植民地時代史研究に多大な影響を与えたメキシコ国立自治大学(UNAM)のミゲル・レオン=ポルティージャ博士(Dr. Miguel León-Portilla)が93歳で亡くなりました。2019年に入ってからメキシコでは、博士へのオマージュと銘打った講演会や演奏会など各種イベントが相次いで開かれていました。

筆者もアミーゴ会の2019年歴史文化講演会の第1回(9月27日)を担当するに
出所:卒寿記念論文集(2018年)あたり、メキシコ大使館からのご提案で拙講演を博士へのオマージュの一環とさせていただきます。その講演の日からわずか4日後の訃報に驚き、悲しむとともに、ここに哀悼の意を表し、その功績の一部を紹介させていただきます。

レオン=ポルティージャ博士は1926年にメキシコ市に生まれ、1956年にメキシコ国立自治大学で博士号を取得されました。ナワトル文学の碩学A・M・ガリバイ・キンタナ(1892-1967年)の指導のもとで書き上げられた博士論文『史料から見たナワトル哲学』は1956年に出版されています。以降、数多くの著書を発表し、『敗者の視点—征服に関する先住民の記録』(1959年、邦題は『インディオの挽歌』)と『古代のメキシコ人』(1961年)は、山崎眞次先生の翻訳で日本にも紹介されました。その他には、『征服の裏側—アステカ、マヤ、インカの記録』(1964年)、『トルテカヨトル—ナワトル文化の諸側面』(1983年)、『エルナン・コルテスと南の海』(1985年)、『ナワトル世界の15人の詩人』(1994年)、『ことばの行く末—メソアメリカの口承と絵文字からアルファベットへ』(1996年)、『人類学の先駆者ベルナルディーノ・デ・サアグン』(1999年)、『トナンツィン・グアダルーパー「ニカン・モボワ」におけるナワトル思想とキリスト教的メッセージ』(2000年)など数多くの著書が存在します。いくつもの主著が英語に訳されているだけでなく、上述の日本語訳のほかフランス語、ドイツ語、ロシア語、チェコ語、中国語、ナワトル語と様々な言語で著書が翻訳出版されています。さらに、『メキシコの歌』(2011年、全3巻)に代表される史料出版にも多大な貢献をされました。

博士の研究テーマは、メキシコ中央部のナワトル語を話す先住民の征服前の文化や哲学に始まり、アステカ征服史ならびにマヤやインカの征服史の見直し、カリフォルニア地域の歴史、植民地時代の先住民史など多岐に亘りました。1957年にメキシコ国立自治大学の歴史学研究所(IIH)の研究員となり、同年から同大学の哲文学部(FFyL)で60年以上の長期間、教鞭をとられました。UNAMへの貢献も多大で、歴史学研究所の所長(1966~76年)を務められたほか、同研究所が発行する学術誌『ナワトル文化研究(Estudios de Cultura Náhuatl)』の編集にも長く携われ、1988年には同大学の名誉教授となっています。数多くの受賞歴に加え、トゥールーズ大学(1990年)、ペルー・カトリック大学(2003年)、マドリード・コンプルテンセ大学(2010年)など国内外の15を超える大学から名誉博士号を授与されています。

博士の業績をすべて調べ上げるのは至難の業で、筆者にその能力はありませんが、仮にそれができたとしても、1冊の本にまとめる必要が生じることでしょう。ここに記したのは、博士の業績のほんの表層に過ぎませんが、私ども研究者が現在行っている研究の礎を築いてくださったことに、心から感謝の気持ちを表明したいと思います。筆者が学部生の頃に拙いスペイン語力で悪戦苦闘し『敗者の視点』を読んだ日々のこと、そして大学院生の頃にUNAMの歴史学研究所でお見かけする度に元気よくご挨拶くださった博士のお姿を回想しつつ、このささやかな短文をもって、レオン=ポルティージャ博士のご冥福をお祈り申し上げます。

Que en paz descanse.

メキシコ料理へのアプローチ

メキシコ料理店 La Casita
オーナーシェフ 渡辺庸生

日本におけるメキシコ料理のパイオニア La Casita(ラ・カシータ)のオーナーシェフ渡辺庸生さんに、ユネスコ食の世界遺産に指定された多様なメキシコ料理文化の真髄を縦横無尽に語っていただきます。どのようなお話しが飛び出すか毎号のお楽しみです。La Casita の HP:<http://www.lacasita.co.jp/menu/sugerencia/index.html> (編集部)

第26章 新チューボーですよ！に4回「出演」

2016年12月24日、TBSの「新チューボーですよ！」がとうとう幕を閉じた。22年の歳月を誇る長寿番組である。思い返せばメキシコ料理の献立の度に出演依頼があり、街の巨匠として王道のスタイルを披露する事が出来た。

基本のトルティージャの生地を練り、伸ばし、焼き方から始まり、タコスやエンチラーダスに絡むサルサの調理に関しても、食材を切る最適の大きさ、配合バランス、熱の入れ方、塩加減等、細かい指導VTRが幸いしたのか、5回のオンエアの内、三ツ星を4回獲得している。この番組だけは私自身が参加出来ないの、スタジオの堺さんの手腕に託すしか無いのだが、ラ・カシータの調理手順を選択して貰えた結果には大感謝である。

最後の出演は2016年の春だった。数年前、メキシコ料理がユネスコ世界無形文化遺産に登録された件もあって、今回の制作スタッフは意気込んでいた。お題は「ビーフタコス」だったが、冒頭でタコスを10種類紹介したいのをお願い出来ますか？との注文が来た。食用サボテンと豚肉の炒め物、真鯛のフリッター、若鶏の唐辛子風味、海老の辛味ソース、豚の胃の煮込み、蛸と茸のトマト煮、鶏もも肉のモーレソース、豚ロース肉のアヒージョ風味、牛もも肉ステーキ、メキシカンライスに茹で卵、色取り取りのタコスが並ぶ景色はおそらく初めての放映であろう。現場では全部美味しそう！と声が上がって大絶賛の収録だった。

若手を紹介するコーナーでも4回目の「未来の巨匠」、そして今回の賄い担当でも店のスタッフが選ばれた。

第27章 東京ディズニーランドの「後押し」

飲食に携わる方々の訪問が増えたのは2000年を迎えたあたりだろうか。茨城や千葉、埼玉等の関東エリアに留まらず、大阪や愛知、広島からも「メキシコ料理をやりたいので、色々とお話を伺いたい」と引きも切らず来訪された覚えがある。たぶん、1990年代後半、「どっちの料理ショー」、「チューボーですよ」、「料理の鉄人」など、全国区で視聴される番組等に出演したおかげで、彼らの目に留まったのだろう。

共通していたのは、注文の品を置くたびに、まず写真を撮ってから皆で探るように食べ始め、前菜、タコス、一品料理を一通り食した頃に身分を明かされて質問が集中したケースが殆どであった。トルティージャやサルサ、一皿、一皿の美味しさに感動して貰えた事は嬉しいが、調理の工程を説明するだけでは理解はされても実践出来るものではないと了解している。ただ持前の使命感がそうさせるのか、一期一会の相手でも包み隠さず教授した。当時は専門書を執筆する前だっ

画面を通じて、ラ・カシータが持つ美味しさの誘惑を表現出来る最大のチャンスに彼も燃えていた。鶏の空揚げの衣にとろこしの粉を混ぜ、ポイルしたじゃが芋と炒め合わせには辛味、香り豊かな乾燥唐辛子をアクセントに加えるなど、着想に富んだ見事な皿を調理してくれた。料理長、セカンド、ホールの皆も感心しきりの賄いタイムの後、休む間もなく、本命の「ビーフタコス」の収録に移って行く。材料は少し厚めにスライスした牛赤身肉、サルサは強い辛味を持つチレ・アルボルとトマト、ニンニクを焦げるまで焼いて、塩で調味したものを選択した。

ディレクターの拘りは半端なものじゃなく、カメラが寄る瞬間にトルティージャや炒め肉から少しでも湯気が少ないと作り直しを命じられ、撮影は12回にも及んだ。朝10時からスタートした収録は12時間後の夜10時に終了したが、全力でやり切った達成感に心地良く、不思議に疲労感は無かった。

放映の翌日は日曜日、開店前から行列が出来、夜まで客足は絶えず、流石の視聴率の高さに感心した。この20年余、メキシコ料理に何度か白羽の矢を立ててくれた制作会社に心からのお礼を言いたい気持ちでいっぱいである。局を代表する番組が終わるのは残念だが、声を大にして申し上げたい。

「本当に有難うございました！」



げに料理を見つめ、これを基盤に味を進化させると向上心に燃えていた。

これを期にレクチャーを重ね、あるときは来日したフロリダディズニーの総料理長までもが視察に訪れた。実現に向けて詳細な打ち合わせが進んでいった。しかし難題が待ち構えていた。商品のコストパフォーマンスと調理時間である。あれだけの大組織である。数字

第28章 ハウスワインはメキシコ産

代官山、旧山手通りにオープンした頃、心に強く決めていた思いがあった。当時の世間が持っていた認識、メキシコ料理といえば「タコス!」。この定説を覆すには来店する客達の期待を裏切り、惑わせ、イメージを混乱させる必要である。まず、前菜からスープ、一品、デザートまで30種類の献立を構成し、タコスはビーフ、チキン、ポーク、チーズの4種に限定、レストランとしての構えで開業した。B3の大きなポケット式ファイルに10ページ、全品写真を配備したメニューは彼らを驚かせ、興味を引き出し、軽食だけでは無いという理解が徐々に浸透していったのである。食器も本国のものを使いたかったが、土が柔らかくてすぐ欠けてしまうので、栃木の益子に出向き、窯元で黒い皿を焼いてもらった。その際、目にした品々が気に入り、ほとんどを和食器で提供してみた。料理と器のコントラストが意外にも受け、雑誌の取材が引きも切らなかったのを覚えている。

調理の味には確信があったが、食べてみたいと思わせる誘惑が不可欠であった。ドリンクは瓶ビールが全盛の時代に、レモンを絞って塩を振り、缶のまま飲むテカビールを置いていた。この時代ライムはまだ希少、高価で使えるものは無かったのでレモンにしたが、好評を博していた。フルコースで食事を楽しむ顧客が増えてゆく中で、食卓に対するもう一つの思いが芽生えて来た。ビールだけでなく、ワインと共にである。休業時代、本国のレストランのテーブルには常にワイ

第29章 「あんたはまだ頑張れる」

「あんた、ようやくなあ、これから頑張りや」と中年の男性に声をかけられたのは、代官山、旧山手通りにオープンして間も無い頃だった。いきなりの挨拶に戸惑っていると、その男はこれまでの経緯(いきさつ)を話し始めた。

彼はメキシコで代表を務めていた日本食レストランのオーナーで、厨房で日本人が働いていると聞き、会食の度に調理場の様子を見守っていたと聞かされた。その店の持ち主の名はSR. JOSE INES LOREDO。本国でメキシコ料理発展の父と称され、料理協会の会長職にある大富豪の彼が手がけた事業が、日本の大手と組んだ合弁会社とはその時は知る由も無かった。その合弁相手が我が国ではワイン、ウイスキーでその名を全国に轟かせた最大の酒造メーカー。その当時、メキシコシティには5軒くらいの和食店が存在していたが、この店の中でも群を抜いた超高級店だった。因みにタコスが一つ日本円で30円くらいの物価の時代、何と味噌汁一杯が700円の価格、とても庶民が食事出来る場所では無かった。そこで要の役職に付く彼が、一介の若造をまさか気にかけてくれていたとは驚きであり、ましてや、励ましの言葉まで頂戴する事態は感謝、感激、雨、あられ、嬉しかったのを覚えている。

は絶対的な証として存在し例外は許されないものだった。残念そうに報告に来た彼は「渡辺さん、申し訳ない。でも例えば航空会社等に提案してこの味を広げたいね」とまだ後押しを考えてくれていた。彼の名は、谷坂賢司。先日、当時フード部長だった同僚の方が来店、2年前に亡くなられていた事実を知らされた。店の味開発計画を推進して頂いた出来事に感謝である。

ンが存在していた。日本ではフランス料理にワインは定番とされていたが、メキシコ料理には想像も付かなかった頃である。業者を当たっても残念ながらメキシコからの輸入ものは無く、試しにポルトガルのポートワインを置いてみたら幸い顧客の評判も良く、手応えを感じていた。しかし、ヨーロッパ物は高価なものが多く、良いワインを探すのに苦慮していた。恵まれたことにその後、カリフォルニアワインが人気となり、リーズナブルな価格で美味しいものを提供出来る状況がやって来た。普通にワインを注文する光景が一般的となった頃、願ってもない出会いが待ち受けていた。

2002年の秋だった。恵比寿のサッポロビールが主催するメキシコワイン試飲会の招待状が届く。ガーデンプレイスの会場には都内のメキシコ飲食店のメンバー、酒卸しの業者達、150人程がひしめいていた。欧州のワインコンテストで最優秀賞を受賞したシャルドネ(白)とカベルネ(赤)は流石にバランス良く、一目で気に入り導入を申し出た。その時、担当者から耳打ちされた。「ワイナリーオーナーのディナーを予約したいのですが?」。光栄なことである。快く引き受けた。

担当部長と共に来店したオーナー夫婦は食事が進む中で「全部美味しい!」と上機嫌で、自分も一安心した時であった。いきなり携帯を取り出し、「私だ、日本にすごい店があるぞ」と本国へ連絡しているのである。部長も驚いていた。

今では店のハウスワインとして定着している。

それからは事有る度に会社の部下達を伴い来店を重ね、前菜、タコス、一品と召し上がるごとに、店を応援するかの如く、「旨いなあ、ほんまに旨いなあ」と大きな声で絶賛してくれた。関西人特有の気さくさは変わらず、帰国後の部長職から常務取締役になり詰めるまで人柄はそのままだった。

ある時、宇津井健さんがこの会社のコマーシャルに抜擢された折、担当者から宇津井さんがラ・カシータの常連だと聞かされ、「あんた、流石や!」と嬉々として電話が入ったこともあった。誠に申し訳ない話だが、店はビール、ワイン、酒に関して全て他社の品揃えで営業している。バブル崩壊で景気低迷の頃、ふらっと一人で来られ、売り上げがおぼつかない現状を打ち明けると、「大丈夫やあんたは、自分を信じていればいい」と暖かく助言してくれた。引退なさってからは半年ずつ、スペインと日本の暮らして悠々自適の生活を送っておられ、在日の際は必ず一度は顔を見せて貰えた。口癖は「わしはもういつ迎えが来てもやる事は全部やった。あんたはまだ頑張れる」である。ここ何年かお逢いしていないが元気で居られることをお祈りしています。彼の名は、「折田 一」。わが人生における最大のシンパの一人である。 <この項おわり>

お知らせ

黒沼ユリ子さん、御宿町の日墨友好文化大使に

千葉県御宿町の石田義廣町長は2019年11月22日、同町在住のバイオリニスト黒沼ユリ子さんを「日墨友好文化大使」に委嘱した。任期は2022年3月末まで。



410年前の1609年、当時スペイン領だったフィリピン・マニラからメキシコ・アカプルコへ向かうガレオン船が御宿(岩和田)沖で難破した際、地元の漁師や海女たちがサン・フランシスコ号の乗組員373人のうち317人を救助した。同船にはマニラ臨時総督の任務を終えて帰墨するロドリゴ・デ・ビベロが乗船していた。ドン・ロドリゴは二代将軍徳川秀忠と大御所家康に謁見し、貿易と外交関係の開始を交渉した。家康は三浦按針(英国人W.アダムズ)に命じて帰還船サン・ブエナベンツラ号を建造させ、ドン・ロドリゴ一行をメキシコ(ヌエバ・エスパーニャ)に送り返した。この史実が後に伊達政宗による支倉常長使節団のイスパニアとローマへの派遣に繋がった。

黒沼ユリ子さんは40年余メキシコに住んで子供たちの音楽教育に献身し、メキシコと日本の文化交流と友好関係の発展に貢献されました。黒沼さんは約5年前、御宿町に移住し「ヴァイオリンの家・日本メキシコ友好の家」を開設、メキシコの音楽家による演奏会や民芸品の展示など文化交流と人的交流・相互理解の拠点として活用している。

御宿町はメキシコのアカプルコとドン・ロドリゴの故地テカマチャルコと姉妹都市交流を重ねており、黒沼さんは両市との交流拡大に努めたいと意欲を語っている。【各種記事を編集部要約：写真はメキシコ大使館文化部FB】

私の本棚

『家康とドン・ロドリゴ』

岸本静江 著



江戸時代初期の1609年、千葉県に漂着したスペイン系メキシコ人貴族ドン・ロドリゴの数奇な足跡と、彼と徳川家康との直接交渉を追う未解明歴史の、史実に基づいた感動の物語です。鎖国前の日本の対外関係や、世界列強の植民地政策の実情、家康の政策と考え方などがドン・ロドリゴを通し生き生きと描かれています。ドン・ロドリゴは、日本でのカトリックの普及と交易のため、最後は本国の許可なく独断で嵐を利用して日本に漂着します。そして、「家康、余はそちに会わんとてここジパングに参ったのだ」と異例の直接交渉に臨みます…。【以上書誌データ等抜粋】

黒沼ユリ子さんは「歴史と小説という2本の糸となって編まれた織物となり、幅広く、色彩豊かな絵巻物」と帯で紹介。ドン・ロドリゴの眼で紡ぎ出した一大歴史スペクタクル。ドンドン読めます。【編集部感想】
富山房インターナショナル 2019年11月刊。3,000円＋税。【目次】第一章 天正少年使節／第二章 無敵艦隊／第三章 メキシコの大地／第四章 マニラの日々／第五章 ここはジパング(1)／第六章 ここはジパング(2)。

お知らせ

特別展「波濤の彼方ーメキシコからの文物」

場 所：睦沢町立歴史民俗資料館

千葉県長生郡睦沢町上之郷 1654-1

詳細：<http://www.town.mutsuzawa.chiba.jp/shisetsu/rekishiminzoku>



会期：10月26日(土)～2月23日(日)／開館：09：00～16：30／休館日：月曜日

内容：白田良子コレクションの名品140点を展示。白田さんは1959年渡墨。大卒後65年からメキシコ国立人類学歴史研究所(INAH)の遺跡遺品修復専門家として活躍。草木染の研究に邁進。深い造詣と確かな目と感性で収集・製作した民芸品1,400点を帰国後の2012年に御宿町に寄贈。北海道在住。

私の本棚

メキシコの黒い絵本『くろは おうさま』

メキシコ生まれの絵本「くろは おうさま」(メネナ・コティン文、ロサナ・ファリア絵、宇野和美訳)の日本語版。クラウドファンディングで翻訳出版が実現。



目の見えない少年トマスが彼の感じる色の世界へ読者を誘う。真っ黒な紙に銀色の文字と光沢のある透明なインクのレリーフによるイラストと、ふくらみのある文字によって書かれた文章が印刷されている。世界14言語に訳され世界が絶賛するメキシコ生まれの美しい絵本。日本語本にはオリジナル点字シートの付録。受賞歴：ポローニャ国際児童図書展ラガッツィ賞ニューホライズン部門 2007年／ニューヨークタイムズ・ベスト・イラスト賞 2008年。(株)サウザンブックス 2019年11月刊。3,500円＋税。

*紹介ウェブ：<http://thousandsofbooks.jp/project/blackbook/>

私の本棚

『テキストとしての都市 メキシコ DF』

柳原孝教 著



「メキシコ市内8箇所のスポットを巡る集会的記憶を扱っています。その場所ですんなりできごとがあり、どんな記憶が紡がれてきたかをひもといたものです」(著者)。時空を超える紀行文文学的都市論。幾多の文献・映画を渉猟しながら、メキシコ DF に迷い込む。過去を幻視しつつ「都市の現在」を無尽に語る。東京外大出版会 2019年11月刊。1,900円＋税。【目次】コンデサ：美しい時代／アナワク：空気のもも澄んだ土地／ソカロ：地下から溢れ出る詩情／トラテロルコ三文化広場：血塗られた広場／テペヤクのグアダルベ聖母聖堂：傾くキリスト教文明／メルセーからテビートにかけて：愛すべき隣近所／コヨアカン：嘆き声が聞こえてくる街／サン・アンヘル：幻のトラムに乗り換えて／セントロ：冥府の詩が聞こえる／書店と図書館：テキストの都市を旅する。

あとがき：恭賀新年。関東圏では新春らしいお天気続きでした。プリア大使には新年祝賀メッセージを、第1回講師の井上先生にはナワトル語世界研究の碩学レオン＝ポルティージャ博士への追悼文もご寄稿頂きました。渡辺シェフのメキシコ料理物語も佳境入りです。しかし編集人の右肘不調は持続的で限界が…交代求む!! 昨秋は毛色の異なるメキシコ関連本が続々出版。お勧めです。[20200111か]